武蔵野日曜集会

恩恵と真理
――ヨハネ伝第１章５～14節――

１９８４年１月15日（武蔵野）
小池辰雄

神の根源語　「パラダイス・リゲインド」（楽園回復）　光が闇を圧倒する　主に愛された者　キリストの無者　顕然たる光　元始にパトスあり　信は即ち現なり　名の中へと信じ入った者たち　名を呼べば答える　神の選びによる　我々と同じ肉となった　無霊の霊　キリスト自身が現実

【ヨハネ１・５～14】

5光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。6神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。7この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。8彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

9もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。13斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生れしなり。14言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

●神の根源語

今日はヨハネ伝の１章5節から14節まで。詳しくやろうとしたら、とてもこんなには進めません。ヨハネ伝というのは内容的に波状的な面がずいぶんありますから、どこででもお話できますので、重点主義でいきます。私はヨハネ伝を今度は自分で訳しますから、今日のところの訳をちょっと読みます。１章１節から、

「1元始に霊言者が在った。しかも、その霊言者は神に対面して在った。そして、その霊言者は神格であった。2この者は元始に神に対面して在った。3万象は彼によって成った。しかも、成ったものは一つとして彼なしには成らなかった。4彼のうちには生命があった。そして、その生命は人々の光であ

った。5しかも、その光は闇の中に照っている。しかるに、闇は彼を圧倒できなかった。6神から遣された人が出現した。その名はヨハネという。7この人は証のために来た。光について証をせんために。それは万人が彼によって信ぜんがためである。8彼はその光ではなかった。光について証をするためであった。

9顕然たる光があった。それは全てのものを照らすもので、現世に来臨している。10彼は世に在った。しかも、世は彼によって成ったのだが、世は彼を知らなかった。11彼は己が族に来たのに、彼の族どもは彼を受け入れなかった。12しかし、彼を体受した者らには神の子らとなる権能を与えた。即ち、彼の名の中へと信じ入った者たちにである。13これらの者は血統からではない、肉の意欲からでもない、また男の意地からでもない。そうではなく、神から生まれたのである。14そして、霊言者は肉となって我らの間に幕屋を張った。かくて、我らは彼の栄光を見た。それは父からの独子らしき栄光で、恩恵と現実性に充満したものである。」（ヨハネ1・1～14、私訳）

そういう訳です。私は非常に現在的な人間です。瞬間にしか生きてない。ものは忘れるし。昔はそうじゃなかったんですが、だんだんそうなってしまった。

では、5節からいきます。

5しかも、その光は闇の中に照っている。しかるに、闇は彼を圧倒できなかった。

文語訳では、

「暗黒は之を悟らざりき」

と訳してある。口語訳は

「勝たなかった」

と訳してある。「圧倒できなかった」というはそっちの方なんです。また、

「闇は光に追いつかなかった」

という訳し方もできる。ヨハネ伝12章35節に、「追いつく」という言葉がある。

「35イエス言い給う『なお暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬように為よ」

と。これはキリストの言葉だよね。

「暗黒に追いつかれてはだめだ」

と。だから、「追いつく」という言葉が案外いいのかもしれない。キリストがやはりここで光との関係で言ってらっしゃるから。

「闇は彼に追いつかなかった」

という訳もできないこともないですが、しかし、この場合は私は、「圧倒できなかった」と

訳した。逆に光に圧倒されたんですから。また、「受けとる、得る、取得する」という意味にとることもできる。言葉というのはいろんな意味を持っている。ロマ書9章30節とか、コリント前書9章24節には、「得る」という気持で使っているのがある。取得する意味で、

「闇は彼を受け入れなかった」

と訳せる。そういう訳し方もなかなかいいと思う。

訳というのは一つの言葉になってしまうから困る。ところが、原語はいろんな意味を持っている。日本語というのは非常に表現が豊かであるだけ、逆に今度は困ることがある。向こうの言葉は一つの言葉がいろんな意味を持っているから、

「どうとでもおとりなさい」

ということで、多義性を持っているところにまた言葉の含みというものがあっておもしろい。あまり一義的にしてしまわないところに。だから、翻訳というのは困る。翻訳は、ある意味において、一種の創作にもならざるをえないところも出てくるわけです。「どの訳が正しい」なんていうことは言えない。それは間違っている訳もあるけれども。

「こうでなければならない」

ということは言えない。言葉というものは弾力性を持っている。また、弾力性のないような言葉ではしょうがないんだ。

「意味ではありませんよ」

というのは、その言葉が持っている響き、たとえば、「圧倒する」という言葉を聞いても、その言葉の意味ではなくして、それからくる響きを受けとっていく。言葉はひとつの暗号ですからね。霊がなければ、聖霊がなければ、本当にその全体の内実をつかむことができない。ギリシア語でもヘブライ語でもありません。神の根源語を、ギリシア語やヘブライ語や日本語やドイツ語の奥の響きを受けとるか。それでなければ聖書は読めない。

●「パラダイス・リゲインド」（楽園回復）

私は聖霊のバプテスマを受けたら、自然が本当に輝いて見えた。なんてうるわしいんだろうと。違うんです、光が。キリストは「パラダイス・ロスト」（楽園喪失）の人間界を「パラダイス・リゲインド」（楽園回復）のところに持っていってくれた。創造以前の、創造のところよりもっと凄い次元にキリストは入れた。そういう人なんだから。黙示録の世界は、最後の新天新地の世界は創造のもうひとつ次元の高い世界なんです。大変ですよ、今度の黙示録は。

私はもうじき八十の峠を迎えるんですが、そういった文章を一気呵成に三頁書きました。やがて『エン・クリスト』17号に発表します。それから、「八十路（やそじ）の峠」という歌もつくりました。一高の寮歌「暁（あかつき）寄する」の曲で歌うようになっている。夜中の12時くらいになって静まってきて祈り入ると、グーッと湧いてくる。私は夜型だからね。いろんな型があっ

ていいんだよ。なんでも早朝祈祷でなくてはいけないことはない。私は深夜祈祷の方だ
しかし、第三イザヤが言いました。

「百歳で死ぬるもなお若しとせらる」

と。百歳で死んでもなお若い。

「いやそれはまだ罪は深い」

なんてその後にすごいことが書いてある。百を越えないと、罪は薄くならないらしい。これは半分冗談ですけれども。とにかく、何も年齢の百なんてことを問題にする必要はない。いくつでもいい。要するに、一日千年の生き方が一番大事なんです。

そういう、パラダイス・リゲンイドの世界なんだ、今は。もちろん、現実は矛盾構造です。パラダイス・ロストの面もあります。しかし、「リゲンイド」を、贖われたる現実というものを、そこに本当に霊的現実として見ることのできるためには、絶対に聖霊の世界に入っていなければダメなんです。一般に、いわゆる感傷的な、あるいは観念的な信仰、あるいは律法的な信仰なんだ。。パウロが手紙を書いて叫んでいるではないですか、この聖霊の世界の喜びを。

「牢屋に居ても喜べ。体は繋がれていても、神の言は繋がれていないぞ」

と言っているではないですか。そういう御霊の世界からズレているのが、今のキリスト教一般の信仰だ。だから、手島君と私が「ナイン。そうじゃない」と言って戦ってきたんだ。無教会でもそのとおりです。いくら「について」語ってもダメです、中からものを言わなければ。皆さんはそういう集会にこうやって連なっているんだから、これはもうもの凄くなっていただきたい。自分の性格がどうだ、生い立ちがどうだと、そんなことではないですから。才能がどうだと、そんなことではない。

●光が闇を圧倒する

闇は光を受けとればよかったんです。受けとれば、光になってしまう。「光を得る」でも、「光を受けとる」でもいい。しかしながら、光が実は闇を圧倒して、光の世界にしてしまう。闇は光を圧倒できなかった。この「圧倒」という言葉になると、「受けとる」よりかもっと強い。光が闇を圧倒するから、私はその逆を書いたわけです、「勝つ」という言葉よりもね。

レンブラントの絵はかなり黒い闇の世界があって、しかし、必ずそこに光が射している。あれは光が圧倒しつつある姿なんです。「最大の芸術家」（召団讃歌Ａ36）という私の讃美歌は全くその「リゲンイド」の世界を歌っている。あそこには罪のことも闇のことも何も書いてない。大自然のうるわしさと、

「人間の文化も本当は神における文化文明なら素晴らしいはずなんだ」

という意味で書いた。現実の文化文明はダメですよ。現実は滅びの文化文明だ。ミルトン（ジョン・ミルトン　１６０８～１６７４）が『パラダイス・ロスト』という素晴らしいものを書

いて、また、『パラダイス・リゲンイド』全4巻も書いたけれども、『ロスト』に比べたら、『リゲンイド』の方がずっと色彩がない。本当は『リゲンイド』の世界をもっともの凄く書いてもらいたかった。それはミルトンの信仰がなお聖霊の次元がらまだズレているから。素晴らしい人なんだけれどもね、ミルトンという人は。

ルター（マルチン・ルター　１４８３～１５４６）も素晴らしかったけれども、パウロの聖霊の世界からはやはりズレています。何といっても、パウロは凄い。もうキリストの他はパウロにかなうやつはいません。ヨハネもそうですけれどもね。ペテロも。とにかく、使徒たちは凄いですよ。使徒行伝のペテロをみてごらんなさい。どうせ、一般には私は理解されなくていいんです。ハッキリと水を割らずにやっていきますから。

今、この部屋は――こんな蛍光灯なんかどうでもいい――太陽の光がこうして射しているでしょ。これは本当に太陽の光がこの自然界を圧倒している。そして、生きとし生けるものを活かしているわけだ。太陽さん、素晴らしいなぁと。信仰がなければ、太陽を拝んだ方がいいよ。日本の国旗は太陽ではないですか。日本人は本当は太陽人なんだ。太陽人にならなくては。国旗を掲げると、なにか好戦的だと思う。大体、学校でも国旗を掲げない。獨協はハッキリ掲げます。国家も歌います。なにも国粋でも何でもない。本当の愛国の気持が表れるだけのはなしです。「我は太陽人である」と、ゲーテがそういう人だった。「ゾンネン・キント」（太陽の子）だった。だから、凄いんです、ゲーテというやつは。

●主に愛された者

6 神から遣された人が出現した。その名はヨハネという。

この「ヨハネ」はもちろん洗礼のヨハネです。他の福音書では「洗礼のヨハネ」という言い方をするけれども、ヨハネ伝ではただ「ヨハネ」と言っている。このヨハネ伝を書いたのはヨハネだけれども、自分のことをヨハネとは書かない。

「キリストに愛されたるかの弟子」

なんていう言い方をしている。彼は「洗礼のヨハネ」ことを「ヨハネ」と言って、自分の名前は持ってこない。ただ「主に愛された者」という。いいね、ヨハネは。自分はキリストに愛されているという。「主われを愛す」というわけだ。あれは讃美歌の始めで終りです。あなた方は「主われを愛す」を本当に歌わなければダメだ。

天野貞祐先生（１８８４～１９８０）が晩年に病気で蒲鉾みたいに動けなくなってしまって、私は一日おきくらいに自転車で出掛けていってお見舞いした。天野先生が「讃美歌を歌ってくれ」と仰ったので、驚いた。昔、一高時代に本郷から柏木までてくてく歩いて、内村鑑三の集会に出掛けて行った。やはり、そういったことが先生の晩年になってまた甦ってきたらしい。

「小池君、讃美歌を歌ってくれ」

と言うから、

「どれを歌いましょうか？」

と聞いたら、

『主われを愛す』（讃美歌461番）がいい」

と言った。

「先生、それは讃美歌のアルファでオメガです」

と私は答えました。そして、歌ってあげた。始めは先生も一緒に歌ったけれども、あとからもう歌えなくなってしまった。先生は96歳、奥さんは四つくらい下か。結婚50年は金婚式です。こないだ私たちも迎えた。その次の60年はダイヤモンド。その次に65年が、ドイツでは鉄なんだ。鉄婚式、「アイゼルネ・ホッホツァイト」という。天野先生は鉄婚式をあと何か月かで迎えるときだった。まぁ、ほとんど鉄婚式を迎えたと言っていい。数えでいえばそうなんだ。天野先生ご夫妻は鉄婚式をまず迎えたと言っていいだけ長生きされた。

ドイツの一番素晴らしい「アイゼン・クロイツ」という「鉄十字章」はドイツでは金鵄勲章だ。非常に簡単なんだ。ビスマルクやなんかは胸に付けている。非常に簡素でいい。ドイツ人は鉄の音が好きなんだね。電車でもドアが閉まる時に、ガチャンと音がするよ。手を挟んだら大変だ。日本のは柔らかくできているが。ドイツ人はそういう音が好きなんだ。

●キリストの無者

7 **この人は証（あかし）のために来た。光について証をせんために。それは万人が彼によって信ぜんがためである。**

「彼について証する」と書いてある。そういう言葉の使い方です。「彼を証しする」とは書いてない。我々は、キリストについて証したってダメですよ、キリストを証しなければ。「光について」と書いてある。洗礼のヨハネは聖霊を受けてないから、「について」くらいは仕方がない。我々は、キリストについて証したってダメなんだ。ところが普通は、「について」ものを言って、「について」説教したりする。ルターが『クリスチャンの自由について』（フォン・デァ・フライハイト）を書いた。よく「について」（フォン、ウィーベル）という言葉を使ってあるのは、本当はよくない。「自由の中で」（イン・デァ・フライハイト）、あるいはただ「自由」（ディ・フライハイト）でいい。「について」となると二段構えになって、もう次元がズレてしまう。あるときは、「について」言わなければならないようなときもあるさ。けれども本当は、「について」ではダメです。

キリストを証するのは本当は言葉ではないんだ――「の中から」ものを言う言葉はもちろんそれでいいですけれども――「を証する」のは生きることだけです。キリストを生きることだけ。黙ってキリストを生きているだけです。

「汝らは世の光なり」

とキリストは言われた。もうハッキリと「世の光なり」と。これは、「世の光なり」と言われたって、誰も及第できない。これを普通のクリスチャンは、そのつもりになっている。「つもり」ではダメなんだ、

「なるだけ、そのように世の光でありましょう」

なんて言ってね。これはここでも言っているとおり、

「そのロゴスは世の光だ」

という。ロゴスは世の光なんだ。だから、「エン・クリスト」なんです。キリストの中にいなければ世の光ではないんですよ。「キリストが世の光である」ことを信じたってどうにもならない。ことについて信じたってどうにもならない。だから、一般の信仰は観念だというのがそのことなんだ。この

「汝らは世の光なり」

という言葉はありがたくてしょうがない。キリストがやってらっしゃるからね、「世の光なり」を。

「さぁ、いよいよ光であるように。この光を失わないように」

なんてやっていると、またくたびれてしまうよ。だから、私は言っているんだ、

「私は光ではありません。無光ですよ」

と言う。

「お前は無光だ」

「はい、そのとおりでございます。光なんかありません。あなただけが光ってくださるんです」

と。だから、キリストの無者なんです、私は。何ものでもない。義でもなければ、愛でもなければ、光でもない。ただキリストがやってきて、義となり、愛となり、光となり、力となり、知恵となる。みな本願の力がやってくる。これが聖霊の世界なんです。そういう現実が聖霊の現実なんです。

「どうも、私は愛が足りなくて」

なんて。いいよ、足りなくて。私なんかはもう足りなくてしょうがない。知恵が足りなくて、力が足りなくて、弱虫で泣き虫でいい。私は弱虫の泣き虫なんだ。ところが、その弱虫が強虫にされる。されるというのは、弱虫は弱虫だけれども、キリストという強虫が入ってくる。だから、

「何と言われようと、一向差し支えありません」

というのがそのことです。私は何と言われようと一向差し支えない。ただ、キリストだけが――もう上からの本願だけ――本願者、本願体受者なんだ。本願をからだで受けとる。全存在で受けとる。最も凄い愛が動く。最も凄い義が光る。最も凄い知恵が展開していく。

私は、88歳までに著作集全12巻を書いて、それから詩にとりかかろうなんて思ったけれど

も、やめたんだ。私の大きな詩篇の始まりは今年から始まる。もうボヤボヤしてられなくなった。並行していく。一番大事な仕事は今年から大詩篇にとりかかります。他の仕事はしないというわけではないけれども。これは完成するまでは発表しません。あるいは、私がぶったおれて未完成で終わるかもしれない。とにかく、私が倒れるまでは発表しないことにする。私はそれだけの使命をおびている。不思議だね、私がなぜ、大学時代からゲーテだ、『ファウスト』だ、ミルトンだ、ダンテだと、ああいうものが好きで読んでいたか、今になってわかる。やっぱり、そういう方向づけが自然にできていた。クロップストックの『メシアス』というでっかい詩がある。世界で最長の詩です。ホーマーの『イリアド・オデュッセイア』とか。もう、聖霊が嵐のようにくるからね。

●顕然たる光

8 **彼はその光ではなかった。光について証をするためであった。**

9 **顕然たる光があった。それは全てのものを照らすもので、現世に来臨している。**

「真の光」というのを私はなぜ、「顕然たる光」なんて訳したか。「アレテイヤ」というのを「真理」とよく訳してある。これは「アレティノス」「まことの」という形容詞ですけれども、この「ア」というのはギリシア語では否定の意味で、「レイテー」というのは「隠れる」という字ですから、「隠れなき」ということなんです。「隠れなき光」、覆われたるものを顕わにする「顕わなる光」と言ってもいい。隠れていないからハッキリと見える。ハッキリと聞こえる。非常に現実的なんです。「まことの」というのは、「現実性豊かなる」でも、「現実そのものなる」でもいい。「まこと」だっていいけれども、そういう意味の「まこと」なんです。ヘブライ語の「真」というのは「アーメン」「エムナー」という字からきている。旧約でも、「真理と恩恵」というのがよく対になって出てくる。それから、「公平と義」。ヘブライ語では、「真」は「アーメン」、「恵」は「愛」と同じ字で「ヘセッド」です。「まことととめぐみ」というのは「真と愛」なんです。「真理と恩恵に満つる」とか、

「キリストは真理であり愛である」

という。これは同じことなんです、結局。離すことはできない。二つのものではない。神さまは「愛」の主体だから、それを受けとることが「真（信）」なんだから。

「信仰と希望と愛とは大事なもので、いつまでも続くが、最も大事なのは愛だ」

という。希望というのがはいってくる。希望という字はあまり出てこない。それはかなり出てもきますけれども。

「エホバを待ち望む」

とあるが、あの「待ち望む」という字はただ時間的に望むばかりでなくて、「信ずる」という字と非常に近い。信頼する意味で、「待ち望む」と訳す。信愛望はずっと繋がっている。

●元始にパトスあり

何といっても、一番中心なのは愛です。「神は愛なり」という。根源愛です。

「元始（はじめ）に根源愛があった」

という。霊言者でなくて、根源愛です。

あの「ロゴス」という字をなぜヨハネは使ったかと思う。ヨハネはエペソにいたから、エペソにフィロンという哲学者がいて、フィロンからいろいろ聞いたらしいね。それで、その言葉をちょっと使って援用したわけだ。けれども、中身はフィロンのとは違うんだ、ヨハネのは。ハッキリ、

「この言は光であり、愛であり、生命である」

と言っているんだから。本当は「言」という訳が果たしていいかと言いたいくらいです。「ロゴス」という言葉は「理性、ことわり、道理」という哲学的な方面の言葉なんですけれども、この福音の世界はそんなもんじゃないんだ。

私は日本人だから、「パトスあり」と言いたい。

「元始にパトスあり」

と。また、

「元始にエトスあり」

でもいい。これは非常に意志的、倫理的です。ドイツ人がそうだ。マルチン・ルターなんかはまさにこのエトスの方だ。もっとも、ゲーテというやつは、「初めにエトス（意）あり」から

「初めに行為あり」

と言ったけれども、彼自身は「ゲフュール」（情感）の世界が非常に深い人ですから、

「ゲフュール・イスト・アッレス」（情感が一切だ）

なんて言っている。とにかく、この「エトス」というのはゲルマン的で、「ロゴス」というのはギリシア的だ。そこで、「パトス」というのは日本的なんです。日本人は情の民だから。こないだドイツ人も僕にハッキリ言ったよ、

「日本人の判断には非常に情が入っている」

と。だから、孔子さんも「恕（じょ）」と言ったでしょ。これは「思いやり」という字です。

「孔子の教えは結局、恕に帰するか」

という。

「わが道はもって一に帰する。それ恕か」

と言った。思いやりです。ところがこの頃、思いやりがだいぶ薄くなったね。日本人は本来の日本人に帰らなくてはいかんよ。思いやりがなくなって、勝手な民主主義が非常にこれが誤った。日本人はヘタにイデオロギーなんかとるからおかしなことになる。「何々主義」なんて言って。やめたらいいよ、「主義」なんてのは。

同情するという言葉よりも、「思いやり」という言葉はもっと積極的な意味だね。「思いやり」というのは「一如の心」ということだ。心をその人と一如にして、その人の中に本当に入って、その人の立場に入っている。

「キリストは思いやることの深い人であった」

とヘブル書に書いてある。それはみんな愛です。パトスです。「パトス」という字はもともと「ライデンシャフト」「激情」的な意味を持った言葉です。ドイツ語で「ライデン」というと、「苦しみを受ける」ということ。「パッション」もそうですけれども。キリストは神の愛を受けとっている。だから、「パテーテッシュ」（激情的）なんだよね。神さまに対する根源愛です。

●信は即ち現なり

「まことの光」という。隠れなきところの光である。だから、私は「顕然たる光」と訳した。顕わなる光。顕然と輝いている。

「我は真（まこと）の葡萄の樹（ぎ）」

とあったね。あれもそうだ。「まことの」は、意味はただ「顕然」ばかりではない。「正真正銘の、本当の」という意味ももちろんあります。ですから、「アレテイヤ」という言葉が、言葉の本来の意味からだんだんそういうように幅ができてくるわけだ。普通の葡萄の木は葡萄の木で本ものだよな。けれども、

「私はこの葡萄の木よりももっと本当の葡萄の樹だよ」

というのが、キリストが仰る

「我は真の葡萄の樹だ」

ということ。この葡萄の樹は限りなく果を結ぶ。普通の葡萄の木はそうはいかんと。キリストの言葉というのは大変な言葉だね。本当に次元の違った絶対次元の言葉だから。それを頭で受けとったってダメです、キリストの葡萄の樹の中に本当に連（つら）ならなければ。

「私の中に連なれ、連なれ」

と言っているんだから。

「我に居れ、居れ」

というのがみんなそうだ。

「私の中に宿りなさい。来なさい。遠くで信じているんじゃないよ。戸の外にいるんじゃない。中へ入って来なさい」

と言うんだ、キリストは。そういう現実なんだからね、この信仰の現実は。だから、

「信は即ち現（うつつ）なり」

と私は言っているでしょ。そういう現実の世界だよと。だから、力が来てしょうがない。生命が来てしょうがない。「生命がくるよ」と仰らなくたって、「はい、そうでございます」

というわけです。

9 **顕然たる光があった。それは全てのものを照らすもので、現世に来臨している。**

それは誰でもを照らす。もう既にこの世に来ている。来ているのに、なぜボヤボヤしているのかと。

10 **彼は世に在った。しかも、世は彼によって成ったのだが、世は彼を知らなかった。**

「世」と言っているのは、罪の世です。これは暗黒の世、背いている世、「パラダイス・ロスト」の世です。「リゲインド」の世界にしようというのに、本当は「彼によって成った」のに、知らない。この世界は彼によって成ったのに、キリストが創ったのに、神の息が創造したのに、神の言が「光あれ」と言えば光がやって来たのに。あの「光あれ」の「光」はキリストの光よりかもちろん次元の低い光ですよ。キリストの光は「日月の照らすを要せず」という光ですからね。瞑想して祈ってごらんよ、凄い世界に入るから、このキリストの光の中に。私はこんな呑気な言葉なんか発していられないんだ、本当は。今もうグーッと異言が来そうになっている。お話がお話にならない。

10 **彼は世に在った。しかも、世は彼によって成ったのだが、世は彼を知らなかった。**

「知る」という。これは頭で知るのではない。ヘブライ人が「知る」というときは、人格的に存在的に交わっている世界です。詩篇139篇の「汝知り給う」という世界です。あれが本当の「知る」です。『エン・クリスト』９号（「汝知り給う」１９８２年５月刊）と12号（「無即無限無量者」１９８２年12月刊）は大事な号です。『エン・クリスト』は私の手紙だと思って、時々読んでくださいよ。私はこの頃めったにお手紙を書きませんから。

手紙というのはおかしなものだ。大体、いただいて一遍読むとあとはしまってしまう。またその手紙を読み返そうという手紙はあまりないようだな。でも、私は手紙は捨てませんよ。手紙や葉書がたまってたまって大変だ。あそこの倉庫の中にいっぱいだ。二階にもいっぱいある。どうしようかと思うが、どうしようもない。人が心をこめて書いたものを私は捨てる気がしない。年賀状でもいっぱいある。印刷ばかりのは捨ててもいいけれども。年賀状というのは時間がかかって困るね。私は五百位やってくると、全部は書きはしませんけれども、何しろ正月から大いにやろうと思っても、年賀状という借金があるものだから、それを書いているうちに時間がたってしまう。けれども、それで後悔はしません。私は心をこめてお返事を書きますから。ものによっては『エン・クリスト』を送ってあげたり、いろいろです。何かきっかけになりはしないかと思ってやっているんだ。

だから、手紙や葉書を書くことも全部、伝道なんです。あなた方もそのつもりでやってくださいよ、すべてね。キリストに救われた者は何をしていても伝道だということです。

それが証なんです。言葉の一番深い意味で伝道意識を持っていなければダメです。道を伝えることです。

●名の中へと信じ入った者たち

11**彼は己が族（やから）に来たのに、彼の族どもは彼を受け入れなかった。**

「己がもの」というような言い方ですが、この場合は、「もの」では困るので、私は大胆に「やから」と訳したんです。それは自分の部族、イスラエルだからね。

12**しかし、彼を体受した者らには神の子らとなる権能を与えた。即ち、彼の名の中へと信じ入った者たちにである。**

この12節はちょっと大事な節です。「彼を受けとった者」というのを、私は「彼を体受した者」と訳した。からだで受けとらなければ、「受けとる」になりはしないからね。「エラボン」という字です。からだで、全存在で受けとりなさいということ。それらには、「神の子らとなる権能を、資格を与えた」という。質的に神の子らとなるわけです。からだで受けとるのだからね。キリストを本当に受けとれば神の子なんです。

「聖霊を受けとらなければ、「アバ、父よ」と言えない」

子ということが言えないと、パウロが言ったように。「受けとる」とはそういうことです。

「即ち、彼の名の中へと信じ入った者が本当に受けとるということだ」

ということ。「その名を信ぜし者」なんていう訳ではうすいから、「名の中へと信じ入る」と訳した。仕方がない。ハッキリとそう言わないとダメだから。「名の中へ」ということで、ギリシア語はそういう言い方をしている。

「名の中へと信じ入った者たち、名の中へと自分を投げ入れた者、キリストの名の中へと投げ入れた者にである。」

ということ。

「主さま！」

と言えば、自分はキリストの中に投げ入ってなければダメですよ、こっち側からただ「主さま」では。「主さま！」と叫んだと同時に全身が投げ入れられていなければ（異言）。そういう世界です。あなた方は聴きながらそういう世界に入っているかね。

「何だかしらないけれども力が入ってきました」

と。

「そうですか、先生はいいなぁ」

なんて、それではダメだよ。先生はちっともよくない（笑）。そんな呑気なのではダメだよ。

「そうだ！　そうです！」

と誰か叫べよ、たまには（笑）。みんなおとなしすぎるよ。それはあなた方、沈黙で叫んでいればいいよ、それで。沈黙の雄叫びというのもあるから。何か身体の調子も気分も悪か

ったのが、集会に来たらもうグングンと凄いことになった、知らないまに風邪はすっ飛んでしまった、何かおかしなのがみんな治ってしまった、ということに成るんですよ、本当に。本当に聴き入っていれば。これも、ただ聞いていたらダメです、聴き入っていなければ。みんな入っていなければダメです、何でも。見入る、聞き入る、読み入る、信じ入るということ。こういうことを言う人があまりないんだ、この「入る」を入れる人が。

●名を呼べば答える

キリストが下さるところの、この生命や自由の世界は説明ではないですからね。「名の中へと信じ入った者」ということ。「名」と言うと、何か空名だと思っている。実名ですからね、キリストのは。「実名の中へ」と訳そうかな、仕方がないから。「実」という字はギリシア語にはなくたっていいよ、「実名」くらいに訳した方が。

「キリストの実名の中へ」

と。「霊名」でもいい。

「彼の霊名の中へと信じた者」

本当は、「聖名（みな）」でいい。しかし、聖名というと、ありふれた言い方になってしまうからね。「霊名」と訳そうかな。

「なんだ、あの小池の訳はひどい訳だ」

と思われていいんだ。ひどいかひどくないか、本当に味わってみろと。

「彼の霊名の中へと信じ入った者たちにである」

と。「霊名」なんて書かれると、ヘタするとお墓かと思われても困る。お墓ではないよ（笑）。霊園なんていうからね。あれは困ったものだね。まぁ、「聖名の中へ」にしておこう。

「聖名の中へと信じ入った者たちにである」

と。詩篇にもしょっちゅうあるでしょ。

「聖名を呼びたてまつる。呼べば即ち答えたもう」

と。我々の間だってそうだものね、「何々君」と言えば、「はい」と言うもの。そういうように答える。その名を呼べば答える。だから、キリストの聖名の中へと――聖名というのは実名だからね――信じ入った者。「聖名が表しているところの実体の中へ」ということだ。

13 **これらの者は血統からではない、**

「アブラハムの子であるから私たちはいいんだと思ったら、とんでもない間違いだ」

とキリストが言ってらっしゃる。自分たちはアブラハムの子だなんて思うなと。血筋がどうあろうと、血統がどうだなんてことではないぞと。神さま・キリストとの関係は、親が信仰があるから私も自然にあるなんて思ったら大間違いだと。各人は絶対に一対一の関係で、親がドロボーであったって構わない。自分はキリストだと。みんなそれぞれ一対一です。これは連続していない。非連続です。だから、血統ではない。

肉の意欲からでもない、

この場合の「肉」というのは、全くこの世的な意味です。その後に出てくる「キリストは肉となった」とは大違いです。パウロが言っている「肉と霊」のあの肉でもない。でも、この場合はそのパウロの言った方の角度です、「肉の欲」というのは。「血統」と同じような角度のものです。この世的な欲ではないと。

また男の意地からでもない。

意地で取ろうとしたってダメだと。私が「意地」と訳したのは「テレマトス」、意欲のことです。そういうものでもないと。

そうではなく、神から生まれたのである。

即ち、「御子を聖名の中へと信じ入る」ということは、それは神の衝動によるんだと。信仰すらも神から触発される。賜りたる信である。神から生まれた。

●神の選びによる

「神から生まれた者は私の言うことをよく聞く」

なんてキリストが言われているが、そのことです。

「そんなことが直接できるか」

と、また神学者がすぐ分析して考える。これは「神の選びによる」ですよ。選びによって、神から生まれるということが出てくるわけです。神の選びは、人間の側からは分からない。そうするとまた、「予定説」が問題になる。「では、私は選ばれていないか」なんて。そういう「選び」というものは――言葉としては客観的に響くから困るけれども――客観的に選ばれているか選ばれていないかということを第三人称の立場から見るような世界ではないんです。イザヤは神に召命された。この召命が選びなんです。預言者たちはみなこの選びです。選ばれたる者。イスラエルの民は選ばれたる民です。「選民」という。

あなた方は選ばれたる人たちです、こんな集会にやって来るなんていうのは。自分がいいから悪いからと、そんなことではない。神さまの側の一方的な――そこは即ち摂理が働いている。ドイツ語の「フォールゼーウング」（摂理）というのはおもしろね。「あらかじめ見る」という。予見している。神さまの予見による。英語でいうと「プロビデンス」です。

「何だか知らないけれども、こういうことになってしまった」

というわけだよ、こっちから言うと。

「何か知らんけれども、私はキリスト教に入ってしまいました」

「仏教だったのが、どういうことだか、こうなってしまいました」

「始めはイスラム教だったのが、こうなってしまいました」

「始めは無神だったのが、こうなってしまいました」

「ヤソなんてのはおよそなんて思っていたのが、こうなりました」

とか。

「それが不思議でしょうがない」

と言う。これみんな神の選び、「神から」です。

その人の運命環境にいろいろな角度から神さまは作用してくる。あるいは、失敗を通して、あるいは悲しいことを通して。大体、神の選びは、「めでたしめでたし」なんていうことを通さないです。なんらかの意味で、行き詰まりがある。人が死んだとかね。

私は兄貴がたおれてからだ、呼ばれたのは。これは神によるんだから。皆さんも、いろいろ信仰歴を考えてごらんなさい。何かしらんが、そういうように、これは神さまの選びだと。こっち側のはなしではない。

「思いもよらないことでした」

と。これが「神から」ということです。いいですね。何も神学的に躓く必要はひとつもない。神からです。こっち側からだったら、それはいつ変わるかしらん。しかし、神からだから、これは変わりようがないんだ、躓いても転んでも。せっかく、神からなのにね、それでも、躓いて転んでさ、

「もうキリスト教はやめだ」

なんていう人があるよな。この集会から去って行った人もある。昔の写真を見ていると、ニコニコしている。どうしてしまったかなぁ、なんて思う。いや、時々、昔の写真を見ると、あぁあぁと思うよ。そして、執り成しの祈りをします。だから、写真を見てても時間がかかるよ。何を考えているんだろうねと。

「小池先生のところは敷居が高いから、まぁちょっと遠慮しておこう」

なんて。なにが遠慮だ。敷居は一番低いんです、ここは。死海みたいに低い。地中海より、水平線よりかはるかに低い。ここはもう世界で一番低いところです。どん底です。どん底だから、登る必要がない。下りてくればいい。どんな所にいても、私の所よりか高いからね、下りてくればいい。楽だよ、下りてくれば。小池先生の所へ下りて行こうと、それが本当なんだ。どん底集会です。そして、どん底に来てみたらば、もの凄く天界へ上げられてしまう。それがありがたい。

●我々と同じ肉となった

14 **そして、霊言者は肉となって我らの間に幕屋を張った。**

この14節は非常に、ヨハネ伝の中で一番大事な句のひとつです。霊言者は肉となった。霊界の存在者が霊界から、天界から、この地界へ下りてきた。「肉となった」ということは、「人間となった」ということです。「人間」とはおもしろいね、「人の間」と書く。和辻さんが書いているけれども。交わりの世界です。交わりのないところには、人間はない。おもしろね、言葉というのは。「肉体となった」の「体」の字はない方がいい。「肉となった」と。「肉体」

というと、ただ精神に対する肉体みたいな感じがする。「肉となった」というのは、「人間そのものとなった」ということです。パウロが言っている「霊と肉」のあの「肉」ではないですよ。パウロは自己本位の人間を「肉」と言う。これが「罪びと」だ。人間はもちろん、手放しでいると、そういう肉なんですけれども、この場合はもちろん、そういう意味で言ったわけではない。しかし、「肉となった」「人間となった」ということは、非常に危機的な存在なんです、キリスト自身も。いつ罪に負けるかもしれない。サタンにやっつけられるかもしれない。だから、キリストはしょっちゅう、

「私の意ではない。あなたの御意です」

と、いつも

「父よ」

と言っている。自分は「父の子」だけれども、人間となって、みんなと同じように泣いたり笑ったり、ごはんを食べたり、眠ったり、悲しんだり、涙を流したり。だから本当に、さっき言った「怨」、思いやることができる人になる。どん底の人となった。キリストはどん底の人となって、思いやりの担いの人となったんだ。キリストの降臨というのがそのことです。馬ぶねの中に生まれたということは、正にその肉となった一番の象徴だね。

大体、マリヤが抱いているキリストを描くけれども、馬ぶねの中のキリストというのはなかなか描かない。そういう絵もあるだろうけれども。本当はそれが大事なんだ。あれは馬の飼い葉桶というのか、藁の上にキリストを乗せておけばいい。中には豆かなんかが入っている。トウモロコシか。あまり絵がきれいすぎるよな。汚い絵を描かなければだめです。レンブラントは描きそうなものだがな。偉大な画家も本当にキリストの福音の姿というものはなかなか描けないものだな。やっぱり、そういった境地に自分を置かないとね。まぁしかし、レンブラントなんかは素晴らしいですけれども。

それで、我々と同じ肉となったということは本当の現実の徴です。最大の徴です。隠れたる徴。「言い逆らいの徴（しるし）」というやつだ。お釈迦さんは王子として生まれた。王宮にいて、もの凄い美人と結婚なんかしちゃってさ。けれども、その子供も奥さんもみんな捨てて出て行った。そこがさすがはお釈迦さんだよな。「生老病死」、この四つの苦しみに対して非常に煩悶して、その解決の旅に出掛けて行った。もう、死ぬほどの苦行をしたわけだ。断食はするし。乙女が牛乳をくれて、それでやっと助かって、菩提樹の下で悟りを開いた。

●無霊の霊

そういう、人となった。しかしながら、人間でありながら、キリストは本当に霊人であったわけです。霊の人――肉でありながら、肉をまといながら、霊の現実を展開していく――彼自身が霊人であるわけです。その霊人は、それではどうして霊人であったかというと、

「自分は何もできない、何も言えない、ちっとも善くはない」

と言って、自分を徹底的に否定していた。彼は霊人であることは、何か摩訶不思議で霊人ではない。神という無限無量なものを、自分をゼロにして受けとっていたから、

「ゼロ＝無限大」

という霊人なんです。キリストが霊人であったのは、「ゼロ＝無限大」であるからです。その無限大なる神に在ってサタンと戦った。必ず勝った。彼は自分の霊力で勝ったのではない。神という霊神がキリストに在って勝ちたもうた。これが神の証者なんです。キリストが神の証者なんです。肉でありながら、神の証者であることを現実にやった。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書でもって、桁違いの彼の言葉、彼の行為に全部それが表れている。

普通の神学者がただ「肉となった」ということだけを強調しているけれども、それがどのような意味において霊であるかということをあまり言わない。ただ本質的に神人合一だなんてことを言っているだけのはなし。いかなる霊であったかというと、これは無霊の霊なんだ。妙な言い方をするけれども。自分には霊がない。霊無き霊。もちろん、そのキリストにおいては渾然一如のすがたです。ハッキリ自分を何ものともしなかったから、私はキリストのことを「無者」と申し上げているので、未だかつて誰もキリストのことを「無者」と言わないでしょ。仕方がない。どんなに誤解されても仕方がない。

それだから、私は「自分の信仰」なんかあてにしない。キリストの無者なんだ。絶対恩寵の世界に入っているだけだ。だから、これを覆す（くつがえす）何ものもない。では、キリストを覆してくださいと言いたくなる。「私の信仰」だったら、覆されますよ、やっつけられますよ。しょっちゅう緊張していなければならない。そんなもんじゃないんだから、私のは。自分の信仰なんかありはしない。私は無人なんです。無者、無人。ただ、「キリストの」なんです。だから、これは賜りたる無です。自分で悟りすまして無になったのではない。これは禅宗的な無ではない。禅宗は大変だよ、悟りの世界に勤行して入らなければならない。座禅をくんだり。要らないんだ、座禅も何も。

じゃ、私は禅宗の寺に行って、座禅しながら眠ってやろうかな。いわゆる座禅ではない。私は眠った方がいい。キリストの中に眠ってますよと、大喝してやる。それだけのもの凄い現実です、私のは。そういう「無」の世界。それは頭では解らんですよ、この無は。誤解するのが本当です。

「信仰によって義とされる」

なんて、そんなことばかり金科玉条にしているプロテスタントや無教会に何事かと言いたくなる。もう、本当に嫌になるな、あの妙なポーズは。鼻もちならない。お気の毒さまと言いたくなるね、正直。

「キリストが肉となった」

ということは、同時にそこには本当に霊が隠れている。神の霊が。だから、その何ものでもないものが、

「我を見し者は父を見しなり。我と父とは一つなり」

と仰った。「絶対矛盾の自己同一」とはこのことですよ。西田哲学は、キリストがちゃんと証明している。「ゼロ＝無限大」というんだから、これ絶対矛盾の自己同一です。

もう、

「自分の現在がどうだ、自分の信仰がどうだ、生まれつきがどうだ、こういう点が欠けている」

なんてことはよしましょう。それは相対的にはお考えになってもいいですよ。けれども、絶対次元の世界では、そんなものは要らんです。まぁ、あまり若い人にこんな高次元なことを言うと、あなた方は戸惑ってしまうかもしれないけれども。とにかく、聞いていてください。ときどきひらめくから。相対的なことも大いにやってください。道徳的なこともいい。それから研究でもいい。何でもやってください。しかしながら、受けとるものはちゃんと受けとりながらやってくださいよ。そうすると、「なるほど」ということにだんだんなっていくから。いきなり、そこに入ったような気になっては困る。その気になってしまってね、なにもそこに入っていないのに、その気になっていると、ガタンと落ちるから。だけれども、ちっとも難しくない。

私はそこを今度の文章に書いた。「八十路を迎えて」という文章に。いろんなものに私は感激する。けれども、ただ一つ例外なものがある。感激でなく圧倒するものがある。それは聖書だと書きました。あの文章を読んだら、ビリビリするよ。そういうように、身体で読んでください。頭で読んだら、目で読んだらダメです。からだで読んでくださいよ、私のものは。そうしたら、もう読んでいるうちに、グーッと聖霊が来てしまうから。

●キリスト自身が現実

「我らの間に幕屋を張った」

という言い方なんです。「スケノオー」というのは「幕屋を張る」という字で、「スケネー」というのは「幕屋」という字です。ヨハネもユダヤ人ですから。天幕を張りながらイスラエルの民は旅をしていた。神さまとの「出会いの幕屋」というのがあって――住まいの幕屋と出会いの幕屋と、幕屋に二種類ある――そこで礼拝をする。我々の間に幕屋を張ってくださって、そして同じ霊的、天国的な現実の中に我々を入れようとしたということが、「我々の間に幕屋を張った」ということ。

「我々のうちに宿り給えり」

という訳も悪くはないけれども、幕屋を張ったということです。「幕屋」という言葉はまた、我々の肉体そのものも「幕屋」とも言う。この場合はそうではない。パウロが使っているような「幕屋」という言い方があるけれども。

肉となって我らの間に幕屋を張って、

かくて、我らは彼の栄光を見た。それは父からの独子らしき栄光で、

「独子らしき栄光」と訳した。「独子としての」でもわるくはないけれども。

恩恵（めぐみ）と現実性に充満したものである。

恵みは即ち、キリスト自身が実は恵みであり、キリスト自身が現実なんです。恩恵と現実性とに満ちている。「まこと」というのは、本もの、現在しているものが「まこと」なんです。現在していなければ、「まこと」ではないんです、思われている世界は。「恩恵と真理」でもいいですよ。でも、「真理」という言い方がどうも観念的にひびいて困る。「真理」と言うと、「うそか、まことか」なんて。「恩恵」というのは、これは愛でしょ。神さま・キリストの愛でしょ。神さまの愛がいかにも現実であったということなんです、

「恵みとまことに満てり」

というのは。本ものであったと。

「本ものの恵みに満ちていた」

でもいい。「真理」というのは「本もの」でいい。

「恵みと本ものに満ちていた」

でもいい。「本もの」というのは現実にそこにあることです。気持はわかりましたね、「アレテイヤ」という字の気持が。隠されたるものが現れたということ。「顕わなる恵みであった」でもいい。その方がハッキリしていいでしょ。「恩恵と真理」とは、「真理」とは一体何だなんて。「我は真理なり」というのは、

「我は本ものだぞ。我は神さまの本ものだぞ」

ということだ。「我は真理なり、道なり、生命なり」というのは、

「自分は神さまからの道、神への道であり、神の生命であり、神の本ものである」

ということです。「真理」というと、なにか原理的に響くね。キリストの世界は原理ではないんだ。「原理」なんて冗談じゃないよ、あの「原理教」みたいのは。現実なんです。いいですね、そういう気合であることを忘れないでくださいよ、この「恵みとまこと」の「まこと」の内実は。キリストは、まぎれもないところの、あらわなるところの、現実なるところの、「めぐみ」そのものであった。

だから、福音書に来て、キリストにぶつかると、圧倒されるんです。圧倒されると、本当にその中に入れる。圧倒されないで入ろうなんて、それは無理ですよ。こっちがいい気になっていたのでは。「参りました！」という世界ですから。「恵みとまこと」とは、それはどういうものかと考えている世界ではないんだから。本当の現実の恵みに圧倒されるのがこの「恵みとまこと」ということ。この訳が悪いね。とかく、マンネリズムになって観念化しているから、私は思い切ったことを言わざるをえない。本当に内容はそうだから。では、今日はそこまで。